

第7回関西生殖医学集談会・第51回関西アンドロロジーカンファレンス

0-14

大阪, 2019.02.23

当院における男性悪性疾患に対する妊孕性温存の検討

今中 聖悟^{1,2}, 貫井 季沙¹, 森本 篤¹, 菊川 忠之¹, 江原 千晶¹, 道端 肇¹
峯川 亮子¹, 藤岡 聡子¹, 井田 守¹, 小林 浩², 福田 愛作¹, 森本義晴³

IVF 大阪クリニック¹, 奈良県立医科大学産婦人科²

HORAC グランフロント大阪クリニック³

【目的】集学的治療の進歩によりがん患者の治療後の生存率が飛躍的に向上し、女性の妊孕性温存に注目が集まっている。同時に不妊症原因の約半数を占める男性因子も重要視されるべきである。今回、我々は当院の男性悪性疾患治療に対する妊孕性温存の現状について検討したので報告する。

【方法】2006年1月から2018年11月末の間に、妊孕性温存を目的として他院より紹介を受け、当院を受診した男性患者78名を対象とした。

【結果】平均年齢は27歳であり(13 - 60歳)、疾患内訳は精巣腫瘍30.8%(24症例)、骨軟部腫瘍30.8%(24症例)、血液疾患17.9%(白血病、悪性リンパ腫等)(14症例)、性腺外胚細胞腫瘍5.1%(4例)、その他の腫瘍15.2%(大腸癌、肺癌、肝臓癌、前立腺癌、膀胱癌など)(12症例)であった。原疾患に対して既に何らかの治療を受けた後に紹介となった患者は28名(35.9%)であった。精子凍結ができなかった患者は5名あり、その原因はAzoospermiaが3名(化学療法後2名、治療前ではあるが原疾患が精巣腫瘍1名)、体調不良で採精困難が1名、マスターベーション未経験が1名であった。精子凍結後融解しART治療に使用した症例は5例(凍結精子使用率6.9%)であった。2018年11月末時点で5組が生児を得ているが、その内訳は2組が凍結精子を用いたART妊娠であり、2組が自然妊娠、1組が人工授精であった。

【結論】ASCOの勧告通り、全例がん治療開始前の精子凍結保存を達成するためには、がんと生殖に関する情報が医療関係者のみならず社会に浸透すること、そしてがん治療病院と生殖医療施設の緊密かつ迅速な連携が、患者の妊孕性温存に必要不可欠であると考えられた。